

W. H. Auden と想像力 I

長 江 芳 夫

W. H. Auden and Imagination I

Yoshio NAGAE

人の想像力はどこまで及ぶものか。何ごとにも限界はあり、無限万能ということはあり得ない。しかし想像の翼は、あらゆる制限や束縛を超えて、自由に飛翔しようとする。

想像力とは、いまここに存在しないものを想う力のことである。¹⁾アテネ大公 Theseus は『夏の夜の夢』のなかで言う。²⁾

Lovers and madmen have such seething brains,
Such shaping fantasies, that apprehend
More than cool reason ever comprehends.
The lunatic, the lover and the poet
Are of imagination all compact:

恋人と狂人は煮えたぎる頭と、
ものを創^{つく}りだす幻想をもち、
冷たい理性が理解する以上のことを考える。
狂人と恋人と詩人は
全く想像力でできている。

しかしまた、想像力は現実を補強し、止揚し、聖化する反面、それが過剰になったときには、幻想が妄念に転じ、超自然の領域にまで飛躍する。Pascal は言う。

Imagination.—C'est cette partie dominante dans l'homme, cette maitresse d'erreur et de fausseté, et d'autant plus fourbe qu'elle ne l'est pas toujours; car elle serait règle infaillible de vérité si elle l'était infaillible du mensonge. Mais, étant le plus souvent fausse, elle ne donne aucune marque de sa qualité, marquant du même caractère le vrai et le faux.³⁾

想像力——それは人間のなかのあの支配的な部分、誤謬と虚偽のあの女主人、いつも狡猾とは限らないのでなおのこと狡猾なものである。なぜなら、もしそれが嘘の確実な規範であったならば、真実の確実な規範で

もあるだろう。しかし、それは大概是偽りなのだから、真実にも虚偽にも同じ特性の印をつけて、自分の特質を少しも表さない。

想像力は、ここにおいて、理性の敵となり、理性を偽る役割をになう。一般に、客観的事実や、五感で確認できる事象を越えて想像することには、科学的信頼は保証されない。しかし、想像力は各人各様に可能性を秘め、殊に藝術家にあっては藝術の源泉であり、生命である。John Cage (1912－) の「4分33秒」(1952) は、沈黙の音楽、音の無い音楽であるが、奏者と聴者はそれぞれ何を想うのであろうか？ それとも、悟入の境地の禅僧のように、無念無想の時を過すのであろうか？ いずれにしてもその間は、*Χρόνος* (クロノス) としての時間は遠ざかり、*Καιρός* (カイロス) としての濃密な時間を、両者ともに生きる——あるいは生きようとする——のであろう。

さて、W. H. Auden の 'Surgical Ward' (「外科病棟」) (1939) [のち 'Sonnets from China XIV'] は、1938年に訪れた中国で、日中戦争の実状に接した折の観察所感を契機として作られた連作ソネットのうちの一篇であるが、人間性と想像力の問題に触れていて示唆に富む。

They are and suffer; that is all they do:
A bandage hides the place where each is living,
His knowledge of the world restricted to
A treatment metal instruments are giving.

They lie apart like epochs from each other
(Truth in their sense is how much they can bear;
It is not talk like ours but groans they smother),
From us remote as plants: we stand elsewhere.

For who when healthy can become a foot?
Even a scratch we can't recall when cured,
But are boisterous in a moment and believe

Reality is never injured, cannot
Imagine isolation: joy can be shared,
And anger, and the idea of love.

彼らは在る、そして苦しんでいる、彼らがしているのはそれだけだ。
繃帯は各自の生きている箇所を隠している、
世界についての彼の知識は
金属器具の施している処置に限られている。

彼らは互いに時代のように離れて横たわっている

(彼らの意味では真理とはどれだけ堪えられるかということだ、それはわれわれのするような話ではなくて、彼らの噛み殺す呻きだ)、われわれからは植物のように遠く。われわれは別の場所に立っているのだ。

というのは健康なときに誰が一本の足になることができるか？
かすり傷でも、治ったときにはわれわれは想いだすことができないで、
忽ち馬鹿騒ぎをして、現実には

決して傷つけられるものではないと信じ、孤独を
想像することができない。喜びは分ちあうことができる、
怒りも、そして愛の観念も。

健康な人は病気の人の心情が分らない。自分が病気にならないと分らない。いや病気になるっても他の病人の心は分らないであろう。自分で同じ体験をしなければ分らない。いや体験すれば分るかという、やっぱり体験しても分らない。自分自身のことでも、「喉元過れば熱さを忘れる」の喩えのように、苦しかったときの想いは、時間の経過とともに稀薄になる。もちろん、想像力の乏しい人の場合でなく、想像力豊かな人の場合のことである。自然の恵みを失って初めてわれわれはそのありがたさを知る。空、山、川、海。地、水、火、風。木、火、土、金、水…。

この十四行詩の前半 octave は、病者——とりわけ戦場の外科病棟の重傷兵——をうたう。瀕死の患者たちは、ただ「在る」(are)、そして「苦しむ」(suffer)のみである。人間実存の、生きるか死ぬかの、ぎりぎり必死の限界状況が、簡潔な筆致で描かれている。後半の sestet のうたうのは一般健常者の想像力である。現実というものは、何ものにも傷つけられることのない強者であって、弱者の立場を想い遣うことは極めて困難である。健康人の幸福、喜び、怒り、愛などに共感することはできても、病者の孤独な哀しみを分けもつことは不可能に近いのではないか。

'Surgical Ward' と同じ1939年に発表された 'Musée des Beaux Arts' (「美術館」) も、苦痛 (suffering) について歌う。

About suffering they were never wrong,
The Old Masters: how well they understood
Its human position; how it takes place
While someone else is eating or opening a window or just walking dully
along;
How, when the aged are reverently, passionately waiting
For the miraculous birth, there always must be
Children who did not specially want it to happen, skating

On a pond at the edge of the wood:
They never forgot
That even the dreadful martyrdom must run its course
Anyhow in a corner, some untidy spot
Where the dogs go on with their doggy life and the torturer's horse
Scratches its innocent behind on a tree.

苦しみについて彼らは決して過^{あやま}たなかった、
昔の巨匠たちは。それが人間に占める位置を彼らは何とよく理解していたことか、
他の誰かが食べたり、窓を開けたり、ただのろのろ歩いたりしているあいだに、
それがどのように起るものであるかを。
老人たちがうやうやしく熱烈に奇蹟的な誕生を待っているときにも、
特にそれが起ってほしいとは思わず、
森の端の池でスケートをしているような子供たちが
いつも必ずいるにちがいないということ。
彼らは決して忘れなかった
恐ろしい殉教の苦難でさえ、とにかく片隅の、
犬が犬の生活をし、拷問吏の馬が
その無実の尻を木にこすりつけているような、どこか乱雑な場所で
道を辿らなければならないということ。

1938年に Brussels の Brueghel 特別展を観たときに、この詩の想が得られた。「イカルス」の他にも、「ベツレヘムの戸籍調査」や「幼児虐殺」も記憶の一角を占めていた。⁴⁾ the aged (老人たち) には、東方の三博士 (the Magi) の投影が認められる。the miraculous birth (奇蹟的な誕生) はキリスト生誕を暗示し、the dreadful martyrdom (恐ろしい殉教) はマタイ伝 2-16 の、Herod 王による幼児たちの殺害に関連がある。

どのように大きな苦痛でも——人の死でさえも——歴史的社会的な重大事件でも、日常性の連鎖の一隅で生起する出来事にすぎない。あたかも自然界で常住繰り返されている生死の必然のように。Auden の複眼は、このような二面的、多面的な対照を、巨視的かつ微視的に捉えて、鮮かに描き出すのである。

In Brueghel's *Icarus*, for instance; the ploughman may
Have heard the splash, the forsaken cry,
But for him it was not an important failure; the sun shone
As it had to on the white legs disappearing into the green
Water; and the expensive delicate ship that must have seen
Something amazing, a boy falling out of the sky,
Had somewhere to get to and sailed calmly on.

例えば、ブリューゲルの「イカルス」では、何もかもが
全く悠長にあの災難からそっぽを向いていることか、農夫は
ざぶんという水音を、見放された叫び声を、聞いたかもしれないが、
彼にはそれが重大な失敗ではなかったのだ。太陽は
いつものように、白い両脚が碧い水中に消えるのを照していた。
そして何か驚くべきものを、空から落ちてくる少年を、
見たに違いない優雅な豪華船も、
どこかの目的地があって、穏かに航海をつづけたのだった。

Brueghel の画面左下に農夫 (the ploughman) が大きく描かれているのに対し、右下隅
には沈みゆく Icarus の両脚だけが小さく見えている。まことに生死の間は紙一重である。
「人が死んでも埒は休まない」と、オランダの諺は言うそうである。日常生活における大
事と小事。客観的事実のもつ冷たさ。歴史の孕む皮肉と矛盾。Auden の想像力は、美術
館をきっかけにして、このように控え目に、非浪漫的に、抑制的にその蒼を膨らませる。

‘In Memory of W. B. Yeats’ (「W. B. Yeats を偲んで」) も1939年作であるが⁵⁾ Yeats の死
について、Auden は凡百の弔詞、弔詩の類いを書かない。それは因襲的弔意を裏切って
冷徹である。その I と II はその意味で象徴的である。

I

He disappeared in the dead of winter:
The brooks were frozen, the airports almost deserted,
And snow disfigured the public statues;
The mercury sank in the mouth of the dying day.
What instruments we have agree
The day of his death was a dark cold day.

彼は冬のさなかに消えた。
小川は凍り、空港にはほとんど人影はなく、
雪が公共の彫像の形を損じていた。
水銀柱は死にゆく日の口のなかで沈んだ。
有りと有らゆる計器類は一致している、
彼の死んだ日は暗い寒い日であったと。

Far from his illness
The wolves ran on through the evergreen forests,
The peasant river was untempted by the fashionable quays;
By mourning tongues

The death of the poet was kept from his poems.

彼の病^{やまい}から遠く離れて
狼たちは常緑の森を走りつづけ、
百姓の川は上流社会の波止場によって誘惑されなかった。
哀悼の言葉によって
詩人の死は彼の詩から切り離された。

But for him it was his last afternoon as himself,
An afternoon of nurses and rumours;
The provinces of his body revolted,
The squares of his mind were empty,
Silence invaded the suburbs,
The current of his feeling failed; he became his admirers.

しかし彼にとってそれは彼自身としての最後の午後であった、
看護婦たちと噂話の午後であった。
彼の肉体のなかの地方が叛乱を起したのだ、
彼の精神の広場はからになった、
沈黙が郊外を侵した、
彼の感情の流れが尽きた、彼は彼の崇拜者たちとなったのだ。

Now he is scattered among a hundred cities
And wholly given over to unfamiliar affections,
To find his happiness in another kind of wood
And be punished under a foreign code of conscience.
The words of a dead man
Are modified in the guts of the living.

今や彼は百の都市にばらまかれ
未知の愛情に全面的にゆだねられ、
他の種類の森のなかに彼の幸福を見出して
異国の良心の掟^{おきて}の下で罰せられる。
死んだ者の言葉は
生きている者のはらわたのなかで修正されるのだ。

But in the importance and noise of to-morrow
When the brokers are roaring like beasts on the floor of the Bourse,
And the poor have the sufferings to which they are fairly accustomed,
And each in the cell of himself is almost convinced of his freedom,

A few thousand will think of this day
As one thinks of a day when one did something slightly unusual.
What instruments we have agree
The day of his death was a dark cold day.

しかし明日の重大さと騒音のなかで
仲買人たちが獣のように取引所の床で吠え、
貧乏人たちがかなり慣れている苦しみを持ち、
各自が自分の独房のなかでその自由をほとんど確信するとき、
数千の人たちがこの日のことを思うだろう
人が何かちょっと異常なことをした日のことを思うように。
有りと有らゆる計器類は一致している、
彼の死んだ日は暗い寒い日であったと。

詩そのものが一切を説明して余すところがない。Yeats の死んだ日のことを、外的世界を、主観的感情を排して、即物的に語る。自然環境、社会状況、身体的変化などについての、自然科学者の記述かとさえ錯覚しそうになる。詩人 Yeats を語る詩人 Auden の背後に、歴史批評家の眼が潜んでいる。Yeats 自身も、自己の墓碑銘として、‘Under Ben Bulbin’ (1938) のなかの 3 行を選んだのであった。

Cast a cold eye
On life, on death.
Horseman, pass by!

冷たい眼を投げよ
生に、死に。
騎馬の人よ、過ぎ行け!

詩人 Yeats は多くの詩を遺した。そうして作品は作者から独立した存在になる。「詩人の詩は彼の詩から切り離される」のである。

10行一連の第Ⅱ部は作者と作品の間の機微を語る。

II

You were silly like us; your gift survived it all:
The parish of rich women, physical decay,
Yourself, Mad Ireland hurt you into poetry.
Now Ireland has her madness and her weather still,
For poetry makes nothing happen: it survives
In the valley of its making where executives

Would never want to tamper, flows on south
From ranches of isolation and the busy griefs,
Raw towns that we believe and die in; it survives,
A way of happening, a mouth.

あなたはわれわれと同じで愚かでした。あなたの才能はそのすべてを生
きのびた、
金持ち婦人たちの教区、肉体の衰え、あなた自身を
生きのびた。狂ったアイルランドがあなたを傷つけて詩を書かせた。
今もアイルランドはその狂気と天気を持ちつづけている、
というのは、詩は何ものも生起させないからだ。詩が生きのびるのは
自分が作った谷間であり、そこには高官たちも
決して手出ししようとはしない、
孤独の農場や、忙^{せわ}しない悲嘆や、
われわれが信じて死んでゆく生^{なま}の町から南へ流れ、それは生きのびる、
一つの起り方、一つの口として。

Gesellschaft (利益社会) の賢^{さか}しら人^{びと}たちのあいだにあって、詩人とは何と愚かな存在
であることか。収益や利便、効率から遠い世界に住む種族として、権力や暴力の前では、
いかに無力なことか。また詩は、自己の領域、藝術以外の世界では、ほとんど無用の長物
である。それは「癒^いしの泉」(the healing fountain)⁶⁾を期待して南を目指す。そして「一
つの起り方」(a way of happening)として、言葉を生み出す「一つの口」(a mouth)とし
て、生きのびるのである。

ところで、'This Lunar Beauty' (「この月の美しさ」)〔以前には'Pur' (「満悦」), 'Like a
Dream' (「夢のように」)] (1930) も、Auden の想像力の特異さを示している。John Fuller
は、この詩は「子供としての恋人の写真についてのもののようだ」⁷⁾と言う。しかしそれも、
抽象化すれば、「月の美しさ」に凝縮するのであろう。

This lunar beauty
Has no history,
Is complete and early;
If beauty later
Bear any feature,
It had a lover,
And is another.

この月の美しさは
歴史をもたない、
完全で幼い。

もしのちの美しさが
何か特徴を帯びれば
それは恋人ができたのであって
別の美しさになっている。

月の美しさは時間を超えた美しさ、永遠の美しさ、完璧の美しさである。しかも生れたばかりの幼児のような、初初しい、初心の美しさである。恋を知らぬ、純心無垢の美、夢のような理想美なのだ。従って、個性が芽生えたときには、それは既に恋を知ってしまったものとして全く異種の美になっているのだ。

This like a dream
Keeps other time,
And daytime is
The loss of this;
For time is inches
And the heart's changes,
Where ghost has haunted
Lost and wanted.

これは夢のように
別の時間を過していて
昼の間は
これの喪失なのだ。
というのは、時はインチであり
心の変化であって
そこには、失われ、求められして
亡霊が出没しているからなのだ。

夢のような月明の美と対照的に、太陽の支配する昼間の時は、人間の歴史を刻む不完全で有限の世界である。価値は数量の単位で計られ、人は煩惱の亡霊に憑きまとわれる。病と死、金銭と地位、幸不幸などにまつわるさまざまの妄執の渦まく領分である。

But this was never
A ghost's endeavour
Nor, finished this,
Was ghost at ease;
And till it pass
Love shall not near
The sweetness here,
Nor sorrow take

His endless look.

しかしこれは決して
亡霊の努力の目標にはならなかったし、
また、これが終わったときにも、
亡霊は安心できなかった。
そしてそれが過ぎ去るまで
愛はここでは月の甘美に
近づくことはなく、
また、悲しみも月の終りのない表情を
帯びることはないであろう。

月の美は現世の煩悩とは無縁である。また、月明の美が終わったときも、煩悩の炎は消えることはない。かくして、浮世の愛は、月の美がこの世からなくなる限り（＝この世に存在しつづける限り）、月の美しさに近づくことはないし、この世の悲しみもまた、月の永遠無限の美貌を身につけることもないのであろう。

Auden の想像力は、いまここにあるもの——それが若い恋人であるにしても——を越え、時間空間を超えて、冷たく静かに広がってゆく。

註

- 1) mental faculty forming images or concepts of external objects not present to the senses (感覚に浮かんでいない外的事物の映像や観念を作る精神の能力) —— C. O. D.
- 2) *A Midsummer-Night's Dream* V, i, 4-8.
- 3) Pascal, *Pensées* 82
- 4) John Fuller, *A Reader's Guide to W. H. Auden* (Thames and Hudson, 1970), p. 121.
- 5) Auden は、アメリカ移住のために、1939年1月26日に New York 港に到着した。Yeats が南フランスで死去したのは、その2日後の1月28日であった。
- 6) Cf. 'In Memory of W. B. Yeats' の第Ⅲ部最終連。

In the deserts of the heart
Let the healing fountain start,
In the prison of his days
Teach the free man how to praise.

心の砂漠のなかで
癒しの泉を湧き出させ、
日日の牢獄のなかで
自由人に讃美の仕方を教えよ。

- 7) John Fuller, *A Reader's Guide to W. H. Auden* (Thames and Hudson, 1970), p. 45.